福崎町文化

第34号　平成30年3月15日　兵庫県神崎郡福崎町福田176番地の1　福崎町文化センター発行

右大臣実朝(大下図、部分)　松岡映丘 画
福崎町柳田國男・松岡家記念館 蔵

旧姫路藩大庄屋・三木家住宅

岩井忠彦

福崎来住以前の三木氏

辻川の三木家住宅は江戸時代に姫路藩の大庄屋をつとめた三木氏の居宅であり、またそのための役所でもあった。

住宅の主である三木氏は、孝霊帝の子孫とも、伊予国小市国造の乎致命の後裔ともいう。小市は伊予国（愛媛県）越智郡のことで、その地名から越智姓を名乗ったが、後に同国温泉郡河野郷を拠点としたので河野氏を姓とした。俗に河野水軍といわれる、海の有力者の一族である。系図の常としてこのあたりの真相は定かではないが、三木氏の祖が当時瀬戸内海の海上交易に関係していたことは事実だろうと思われる。

一四世紀、通堯が当主の時、讃岐国三木郡、現在の香川県木田郡三木町に移った。高松市の南東の農村地帯である。出身地あるいは居住地を姓とするのが日本の伝統だ、という柳田国男の指摘の通り、これ以後三木姓を名乗ることになる。しかし三木を根拠地にした期間は短く、通近の代に播磨の英賀（英賀保、姫路市）へ移った。江戸時代の地誌『播磨鑑』によれば、南北朝時代末期の康応年間（一四紀末）のことだという。守護である赤松氏の勢力が強かった頃で、通近の嫡子の通武は赤松満祐の娘婿になり、英賀城（姫路市）を拠点として活動した。

英賀城本丸跡付近

英賀城の土塁
（英賀神社境内）

当時は書写山南麓の坂本が円教寺の門前町として賑わい、商工業が発展して人口が集中していた。西坂本には赤松氏の守護館が置かれ、政治的にも経済的にも播磨国の中心地だった。英賀（英賀保）は夢前川を通じてその外港となり、海上交通の要衝として繁栄していた。東福寺首座だった季弘大叔の日記『蔗軒日録』の文明一七年（一四八五）三月二〇日の条には、朝英賀を出港、夜半に泉津（堺か）に着いたとある。これをみると、ほぼ定期船のような形で堺港（大阪府堺市）あたりと連絡があったらしい。河野水軍の流れをくむ三木氏には恰好の地だった。

江戸時代の『赤松家播備作城記』によれば、当時の英賀城は三木与市兵衛・井野甚兵衛などの五人が城を守っていた。これが事実だとすれば、堺や博多と同じように有力商人が共同で支配していた可能性がある。実際、英賀には大規模な軍事的施設が築かれていた痕跡がない。瀬戸内海や夢前川などの水に守られた地形を活かして守備する、構居のようなものだったようである。

一五世紀末、ここに浄土真宗（一向宗）の教線が延びてきた。明応八年（一四九九）頃には六つの坊と三つの道場が、永正一五年（一五一八）には英賀御堂が建設されて、播磨布教の拠点になった。

戦国時代末期、天下統一を目指す織田信長は一向一揆と各地で争い、最後に大坂（大阪）の石山本願寺との戦いに入った。英賀城も信長方の武将羽柴（豊臣）秀吉軍の攻撃を受け、天正八年（一五八〇）に陥落する。織田対毛利の最前線で、華々しい合戦があったとも伝えられる。しかし、網干の住民に縄や竹を持って合戦に参加するよう命じているところをみると、秀吉は正面から攻撃するのではなく、水に守られた城を逆に水攻めにする戦術だったらしい。『信長公記』のいうように、それほど激しい戦闘はなかったというのが真相のようである。

合戦が終わると、秀吉は英賀城の残党を厳しく追及せよと布告する一方で、英賀御堂を二分して船場と亀山（ともに姫路市）に移して再建させ、所領を与えている。このあたりが秀吉の戦略眼の凄さで、抵抗力を失った敵を討つために味方に無用の損害を出すことを嫌い、逃げ道を

与えて戦闘を終結させたのである。

その結果、英賀城の有力者も多くは諸方へ散っていった。商業を通じて各地と交流があり、新しい知識や技術を蓄積していたからだろう、彼らはその後さまざまな方面で活躍している。三木安忠もその一人で、飾磨津（姫路）に移って酒造業などを営んだ。この頃になると、姫路城とその城下町が播磨の中心として繁栄を始めていた。飾磨津はその外港として急速に発展し、多くの人々が各地から集まっていた。

三木氏、福崎へ移る

飾磨津に移った安忠の子息の利通・通称甚左衛門が、当時の姫路藩主榊原（松平）氏の新田開発計画に応じて福崎町の辻川に居を移したのは、幕藩体制が安定に向かいつつあった明暦元年（一六五五）のことである。

福崎町の市川左岸地域は、中世にはほぼ田原庄に含まれていたが、市川の河岸段丘面に立地しているために灌漑の水は小さな谷川や溜池に頼らざるを得ず、未開発の部分が多かった。これは他の大きな河川流域にも見られる現象で、中世の土木工事の技術では、市川の水を灌漑に使うことは難しかったのだ。

辻川に移った利通も二代目の吉忠も、市川左岸の段丘面の開発に取り組んだ。その努力が短期間で実るはずはなく、以後代々、そのための努力を続けなければならなかった。例えば五代目当主の通庸は、寛政元年（一七八九）、藩の許可を得て市川の難所だった犬ヶ鼻（大鼻岩）付近を開削している。井ノ口など九か村の住民はその功を讃えて、天保一四年（一八四三）に「新渠碑」を建てた。それは今も井ノ口の国道東側に残っている。また、六代目の通明は、幕末近くなっても開拓が進んでいなかった、西光寺野の開発を主導している。こうした努力の結果、この地域の耕地は確実に広がっていった。

通庸の前々代、三代目当主の善政が姫路藩から辻川組二一か村の大庄屋役を命じられたのは、元文二年（一七三七）のことである。大庄屋は概ね各村に置かれていた庄屋を、さらにいくつか束ねて統括する、姫路藩独特の役職である。法令の伝達や年貢等の割り付け、管内の村々の紛争の処理などにあたり、名字帯刀を許されるのが普通だった。単なる末端の行政官ではなく村落共同体の長という一面もあったから、住民の信望があることも必要だった。以後、八代目の通済の時に明治を迎えるまで、三木氏は代々大庄屋役をつとめることになった。

三木家住宅にも危機はあった。義人滑原甚兵衛で有名な姫路全藩一揆が起こったのは、五代目の有敬が大庄屋役を継いだ寛延元年（一七四八）のことである。正確な記録は残されていないが、『播姫太平記』は約六〇の庄屋や大庄屋宅が打ち壊されたといい、『播陽多我身飢』によれば打ち壊しを免れた大庄屋を九家とする。一揆の指導者たちは保管されている文書を審査し、打ち壊すかどうかを決めたともいう。三木家がそれを免れたのは、新田開発の実績などもあって住民の間に信望があったからだろう。

明治四年（一八七一）には、当時の姫路県・生野県で播但一揆が起こった。役人が三木家に出張中だったこともあって大勢が押し寄せた。刀傷など多少の破損は被ったが、この時も建物が破壊されてしまうことは免れた。

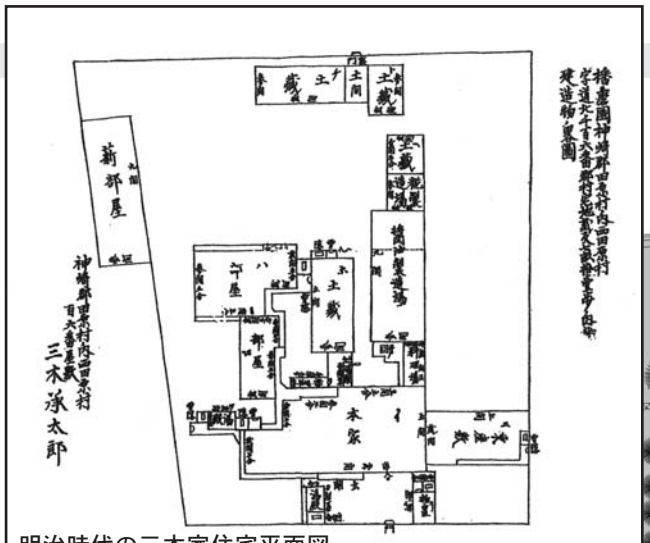
三木家の住宅群

辻川に移るとともに三木家の居宅も建てられ始めたはずだが、現存する建物のうち最も古いものは元禄一〇年（一六九七）の内蔵、次いで宝永二年（一七〇五）の主屋、正徳三年（一七一三）の酒蔵で、これらは二代目の吉忠時代の建造である。続いて、三代目の善政の時の安永二年（一七七三）に副屋と離れが建てられた。さらに江戸時代の後期に角蔵と厩が、明治七年（一八七四）には表門が、そして明治時代前期に米蔵が完成した。これら現存する九棟のすべてが、昭和四七年（一九七二）に兵庫県の重要文化財に指定されている。これだけ多くの建物が残っている例はめずらしいし、戦後まで使用されていたので、生活の場としての雰囲気を今なお漂わせている。その意味でも貴重な文化財である。

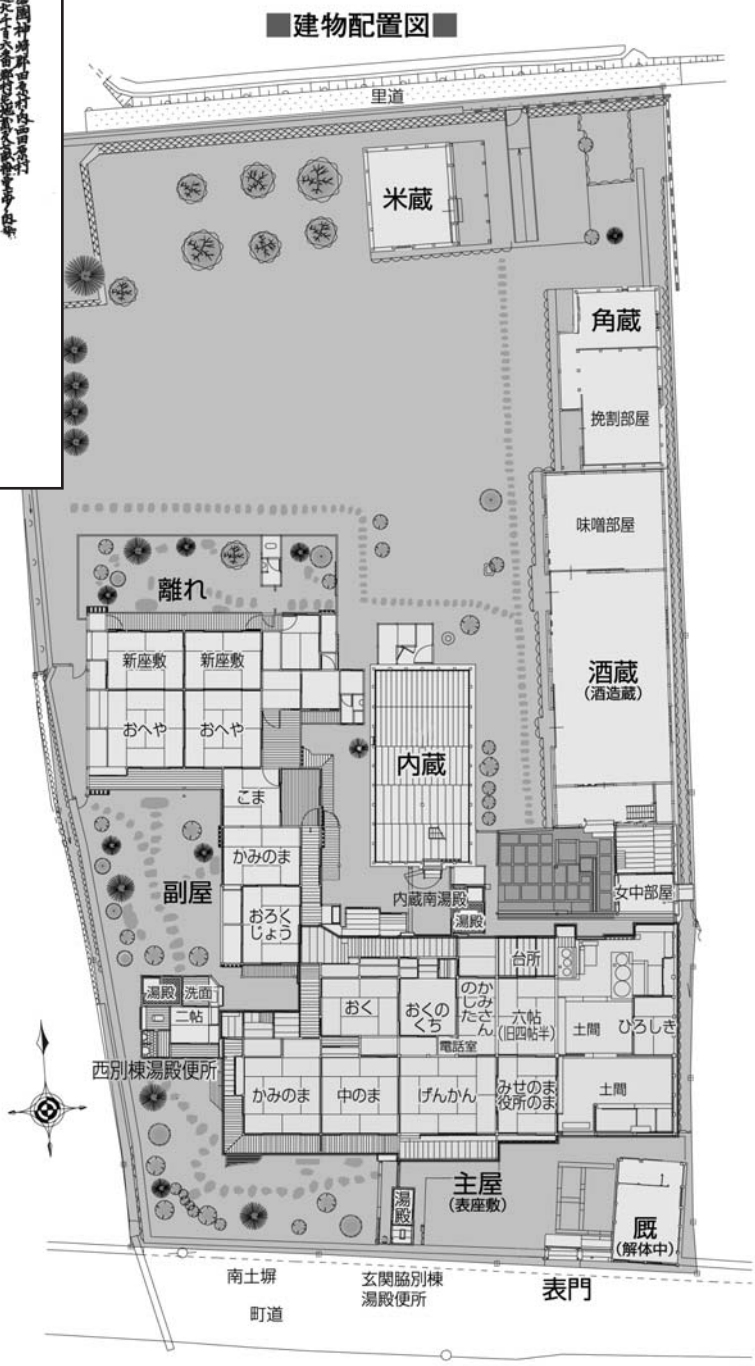
主屋―播磨伝統の建築様式

住宅群は築地塀に囲まれた広い敷地に建てられている。表門から入るとすぐ、正面に建っているのが主屋である。表門は切妻造本瓦葺、二間一戸の棟門である。切妻造は、例えていえば書物を半開きにして伏せた形の屋根の形式をいう。表門や土塀と主屋との間隔が狭いように感じられるのは、南側の道路が拡幅された際に用地として提供したからである。この表門はその時に改築された。

主屋を見よう。播磨の民家の伝統



明治時代の三木家住宅平面図
当時の当主は三木通済（承太郎）



三木家住宅リーフレット掲載の建物配置図を一部改変
図面製作：尾瀬耕司（神戸建築文化財研究所）

である外見上の特徴は、入母屋造平入口だった。入母屋造は切妻屋根の下方に庇をめぐらした屋根の形で、平入あるいは平入口は主屋根の面が見える側から棟（桁）に向かって直角に入る形式である。土の通路が入口から裏口まで続き、右側に厩と土間、左側に田の字形に四つの部屋があるのが、播磨の民家の基本的な形だった。これも県の重要文化財である柳田国男の生家もそうだが、三木家の主屋もこれをベースにした建て方になっている。現在は東西に広いが、西側の表二部屋は元文二年（一七三七）に増築されたもので、当初は二部屋だった。行政機関としての役割があるので、これでは手狭すぎたのだろう。

主屋は桁行が十一間で梁間が四間という大きな建物で、本瓦葺の屋根は広く重厚である。鬼板（鬼瓦）には三木家の家紋を刻み、東側頂部には越屋根と呼ばれる小さな屋根がある。越屋根は吹き抜けになっていて、炊事その他で使われる多量の薪炭の煙の排出や、採光、通風などの機能を持つ。それだけではなく、広い屋根に変化を与えることで、結果的にその単調さを和らげる効果を生んでいる。また、入口の上方、大屋根と庇の間の虫籠窓や入口西側の格子が、近世民家の伝統的な美しさを今に伝えている。

入口から大黒柱の右（東）側を通って裏口まで、これも播磨の民家の伝統を受けた通り抜けの土間になっているが、中ほどの大黒柱筋に格子戸を設けて南北に区切っている。大黒柱は棟まで届く長大なものである。厩が

三木家主屋と表門

主屋入口　虫籠窓と格子

主屋の東南隅に別棟に建てられているので、通路東の表側は唐臼の置き場になっている。その上方は中二階の下男部屋で、壁梯子によって出入りする。

格子戸の北側には、天井が吹き抜けになった三畳間の「ひろしき」がある。その奥、通路西側の台所に面するあたりには竈などが置かれている。

通路左側の居室部分に移ろう。表（南）側は、東側から順に「みせのま（役所の間）」、「げんかん」、「中のま」、「かみのま」になっている。「みせのま」は六畳で、主として大庄屋役の日常業務に使われた。ここの天井裏は「つし二階」になっていて、そこへ上がるための階段が通路側に設けられている。

「かみのま」の書院、床の間など

「げんかん」は十畳で、これも多くは行政的な用務に使用された。部屋の庭に面した南側は玄関式台になっていて、藩の役人などはここから家に入った。それで、入口すぐ左側の部屋を「げんかん」と呼ぶ。

「げんかん」前の庭は一種の広場で、その奥の植え込みのある庭とは「げんかん」と「中のま」の境界線を南に延長した部分に設けられた別棟の、藩の重役などの来訪時に使われたという湯殿・便所と板戸とで切り離されている。ここは、所轄する村々の争論などの評決が行われる時に、いわゆる白洲として使われた。

庭と「げんかん」の玄関式台

「中のま」と「かみのま」は併せて表座敷と呼ばれる。ここは重要な来客の接待などに使われる部屋である。「中のま」は八畳で、北側の東半分に仏壇、西半分に天袋と違い棚を付ける。普段は閉じられて見えないようにされているが、その下に格子窓があって北側の「おく」とつながっている。表座敷で異変があった時のための通路であり、一種の武者隠しである。「おく」の外には、危急を知らせるための半鐘が吊り下げられている。いずれも普通の民家にはみられない仕掛けである。

「かみのま」は八畳で、部屋の北側に床の間をつくり、西側には付書院が設けられている。「中のま」との間には透かし彫りの欄間が美しい。表座敷二部屋の南側は縁側で、その外は前栽になっている。

西別棟二畳間の床

「かみのま」の西には別棟の二畳の部屋・湯殿・便所があり、縁側でつながっている。小さな部屋だが床柱に竹を使うなど数寄屋造風の、一種の遊び心が感じられる。

主屋一階の北側は、土間側から順に「よじょうはん」、「かみさんのした」、「おくのくち」、「おく」の四部屋になっている。

「よじょうはん」の北側は台所に改造されているが、もとはこれを含めた六畳の部屋だったらしい。

「かみさんのした」は四畳で、「よじょうはん」との間は三枚の板戸で

仕切られている。中央の戸の上部の目の高さのあたりに「よじょうはん」側を見ることができる円い覗き穴があり、鴨居の内側には槍掛けもある。防犯や変事の際に備えたもので、これも普通の民家には見られない細工である。

「おくのくち」は四畳半で、「かみさんのした」との間は引き違い戸で区切られている。容易に開けられないように、この板戸などにもさまざまな工夫が施されている。

「おく」は六畳で、北側に床の間と押入れがある。南側にも押入れがあるが奥行きは浅く、引き戸と格子がある。ここが「中のま」との通路の「おく」側の出口である。また「おくのくち」との境の鴨居には、「かみさんのした」と同様に槍掛けも設けられている。

「中のま」から「おく」への通路

副屋と離れ、土蔵など

表門と主屋以外の建物に移ろう。副屋は二階建本瓦葺の建物で、主屋の西北隅の「おく」から北へ三畳の板の間まで延びる、廊下の西側にある。南から「おろくじょう」・「かみのま」・「こま」の三室と三畳の板の間になっていて、主屋と離れをこの廊下で結んでいる。「おろくじょう」と「かみのま」は六畳で、「おろくじょう」の西側は二間の押入れになっている。「こま」は四畳半で、東側の一畳半分が板張りになり、廊下の部分と合わせて三畳の板の間を構成している。

副屋の北にあるのが入母屋造本瓦葺の「離れ」で、副屋の廊下によって主屋と結ばれている。この建物の中心になるのが田の字型に配置された四部屋である。

南側の二室はともに八畳で「おへや」、北側の各六畳の二室は「新座敷」と呼ばれている。南北とも、西側の部屋には床の間を設ける。「おへや」両部屋の南側と「新座敷」両部屋の北側とは濡れ縁になっている。平書院や付書院などを設け、面皮柱を用い、長押を使って天井がやや低いなどの特徴がある。数寄屋造を加味した建築で、主屋とは趣が違う建て方になっている。これらの部屋の北東には物入れや布団部屋、便所などがあり、これを加えると「離れ」は六部屋になる。

北から見た三木家全景

内蔵（左）と酒蔵（右手前）・角蔵（右奥）
主屋裏口から

裏口を北に出たところの中央にあるのが、現存する建物の中では最も早く建てられた内蔵である。その東側に飾磨津時代を思わせる酒蔵、酒蔵の北に角蔵、そこからやや離れて敷地の北端の中央東寄りに米蔵がある。建てられた時期はそれぞれ違うが、いずれも一重二階建の切妻造本瓦葺の建物である。なお、酒蔵は北側の二間半分が味噌部屋、角蔵は北側一間半が蔵で残りは引割部屋になっている。いずれも火災に備えて分厚い土壁で塗りこめられている。

敷地の東南隅には厩があるが、久しく使われていないため荒廃し、解体修復中である。そのほかに隠居所もあったが、道路の拡幅時に取り除いたという。大工仕事などのための作業場なども撤去されている。その他は現在見られる通りである。

地方文化の中核として

明治初期に作られた三木家の蔵書目録には、為政者必読とされた『資治通鑑』や『六諭衍義大意』などの

漢籍、『万葉集』や『太平記』などの日本の古典、『農家益』『農業善処』などの農業書、『天文図解』『馬医書』などの実学書、『切支丹由来』や『異船事実記聞』などの時事関係の書物等々がみえ、多量かつ広範囲に及ぶ書物が所蔵されていたことが知られる。柳田國男が「みせのま」の上の二階で三木家所蔵の書物を読み、それが柳田民俗学の原点の一つとなったというのは、広く知られた逸話である。北条（加西市）へ移った家族と別れて一年余りの間三木家に預けられていたのは、明治一八年（一八八五）、十二歳の頃のことだった。

三木家代々の当主は学問や芸術を好んだ。五代目の通庸は明和九年（一七七二）、一八歳の時に京都に出て皆川淇園に師事しているし、六代の通明は庶民の大学といわれた大坂（大阪）の懐徳堂の堂主だった中井竹山や、龍野（たつの市）の藩儒、股野玉川の家塾の幽蘭堂に学んだ。三木家と懐徳堂の結びつきは長く、蔵書目録も懐徳堂の罫紙に書かれている。七代目の通深は父の通明とともに姫路の島琴陵に絵画を学び、大坂に出て並河寒泉に、江戸で当時の大学頭林檉宇に学んだ。三四歳という短命だったが天才肌の文化人で、学者や文人墨客が各地から集まって逗留して自由に創作活動を行い、三木家は一種のサロンのような状況になったらしい。そのために家産を相当に消耗したというが、彼らの作品なども三木家には多く残されている。

自分が得た学問や文化を周囲に紹介し広めていったのも、三木家の功績の一つである。松岡家との代々の交友はよく知られていて、例えば通庸と柳田國男の曾祖父で医師だった義輔とは詩友であり、祖母で儒学や文学に秀でた小鶴は通深との交流でも知られる。このような活動を通じて、学問や芸術を尊ぶ気風が地域に浸透した。明治時代に多くの文人学者を輩出した背景には、その蓄積があったからに違いない。それは現在にも受け継がれ、社会の深層に生き続けているように思われる。

三木家住宅、その後

しかし、これほど多くの建物を管理し維持し続けることは難しい。かつては、たとえば大工さんや左官さんと年に各六〇人役の契約をしていたという。日時を限らず年に六〇日三木家に来て、気付いた所を補修・修築してもらったのである。それほどの手入れが必要なのだが、これには大きな財力を要する。広大な農地を所有していた時代にはできても、特に戦後になるとそれは不可能になった。また、人の出入りがなくなると建物は傷む。これだけ数多く広い建物を維持するためには、多くの人がここで生活する必要があるが、それも無理な時代になった。

蔵書や文書などが流出し、何度か盗難にも遭った。昭和五〇年代に入る頃には西別棟などで虫害が発生し、屋根も波を打つ状態になって、瓦の落下が心配されるようになった。重い土を大量に載せた屋根の重みなどによって太い柱や鴨居さえ歪み、補強しても動かない建具が増えた。十代目の当主だった庸一氏の夫人美子氏が、建物の換気を兼ねて春・秋の休日に見学者に住宅を開放され始めたのは、昭和五十年代半ばのことである。

その努力があっても、これだけの規模の住宅群を個人で管理し、維持することは事実上不可能だ。幸い当主の三木雅雄氏や福崎町当局の決断により、平成一六年（二〇〇四）に三木家の建物群が町に寄附された。現在では、修復を終えた主屋が一般に公開されている。

文化財は一度失われると元に戻らない。さまざまな意味で貴重な文化財である三木家住宅群を、後世に永く伝えたいと思う。

傷みの激しい主屋昭和55年

響け　歌声!!

合唱団サリマライズ

幹事長　横田　公博

神崎郡の合唱団の草分けとして知られている私達「合唱団サリマライズ」も結成45周年の節目を迎えた昨年6月、記念演奏会を開催し会場いっぱいのお客様の中、成功裡に終えることができました。

「合唱団サリマライズ」は、昭和48年4月に福崎高校の卒業生6名にて結成され、翌年1月より福崎町公民館クラブ活動の一環として福崎町文化センターにて活動を開始しました。

これが私達サリマライズの原点です。

一時は団員の減少で存亡の危機に瀕したこともありましたが、今では総勢51名（女性29名・男性22名）の団員を有するまでに大きく成長し、神崎郡や西播磨地区にとどまらず多方面に名前が知られています。

年齢層も20から70歳代と幅広く職業も様々ですが、結成以来の家族的な雰囲気の中で、毎週水曜日午後7時30分から9時まで、福崎町文化センター（大ホール）にて、いろんなジャンルの曲に取組んでいます。

サリマライズの次の目標は、結成50周年記念演奏会ですが、団員のモチベーションを維持するため、それまでに演奏会を1つ開催しようと考えています。団員は常に募集しています。おもしろく楽～な合唱団です。

ぜひ私達と一緒に歌いましょう。

「いつも心豊かに友と歌いたい」

童謡・唱歌の学校

副代表　大西　厚美

私達のグループが誕生したのは平成18年6月です。

幼い頃より親しんできた想い出の童謡・唱歌・抒情歌などを懐かしみながら歌っています。

毎月2回第一、第三土曜日午前10時から11時30分迄、文化センター小ホールで練習しています。

始めに秋武先生のご指導くださる全身をほぐすストレッチは皆さんの楽しみの一つになり、また、引き続き水野先生の発声練習も同じく笑顔になり歌の練習に入ります。

途中ミニ休憩をはさみながらの練習は、心も身体もリフレッシュでき、1時間30分が、あっという間に過ぎてしまいます。

始終、笑顔で、とても充実した時間です。

また、グループ誕生の頃からの斉唱から少しずつ成長したハーモニーに歓びを感じ、満足して終わる会へとなってきました。

発表の場は、毎年1月末にエルデホールでの『ふるさと文化祭』、3月第二日曜日の文化センターでの公民館クラブ春の発表会に参加出場しています。

皆さん！ご一緒に歌いましょう！

※入会は随時行っています。

「仲良く・楽しく・健康に」

福崎ひるハーモニー

代表　牛尾　千歳

私達のサークルは、発足15年目になります。スタートは、「歌が大好き」「童謡や唱歌を一緒に歌いたいネ」から始まっています。

練習の始めは童謡・唱歌を歌い、発声練習、体操をしています。今は次の音楽祭に向かって色んな曲にチャレンジしています。メンバーの中にはきれいな高音の出せる方や低音のきれいな方がいてより美しいハーモニーを目指して日々はげんでいます。

毎月第二、第四月曜日午後1時30分から3時まで八千種研修センターで練習しています。始めはうまくなくても心身のリフレッシュ、老化が進むのを緩和する事を目標に、60～85歳まで20名で活動しています。メンバーの中には男性もいます。指導は大澤淑先生に、発声と体操は北美貴子さんに指導を受け、和気あいあいと時にはきびしく練習をしています。

発表の場としては「ふるさと文化祭」「かんざき合唱祭」「八千種研修センター祭り」等に出演しています。ボランティア活動としては年に1回9月に町立福寿園に行って入居者の皆様と一緒に歌ったり、お手玉を使って遊んだりをしています。

サークルでは、先生は次の練習日に忘れていても笑顔で根気よく御指導下さいます。大きな口をあけて、大きな声を出して歌った後の爽快感をご一緒に味わってみませんか。

男性・女性・年齢を問いません、ご参加をお待ちしています。

募集！
年齢・経験不問。
但し女性

女声合唱団ポーコ・ア・ポコ

代表　山田　せい子

・練習会場　八千種研修センター
・練習日時　土曜日13時45分～15時45分
・指導者　兼武とき子（関西歌劇団団員）
・伴奏者　福島智子（ピアノ講師）

〝ポーコ・ア・ポコ〟というのは、少しずつという意味の音楽用語です。私達は関西弁で「ボチボチ」と訳しています。

31年前、田原小学校音楽室でPTAコーラスとして産声をあげましたが、その後10年程で団員の子供達が小学校を卒業し、練習場所も現在の場所に移り、公民館クラブに加盟しました。

阪神・淡路大震災の折、何かせずにはいられないとの思いで、避難所の中学校のまだガラスのかけらの散らばる理科室で、小さなコンサートを開きました。被災者の皆さんと涙で歌った『故郷（ふるさと）』の歌。今も忘れ得ぬものとなっています。音楽の持つ大きな力を実感しました。

怖いもの知らずで色んな挑戦をしてきましたが、〝交響詩ひめじ合唱コンクール〟では、賞を頂くというれしい経験もさせて頂きました。

また、音楽を通して何か役に立ちたいとも思うようになり、〝福崎町まちの先生〟に登録し、学校、福祉施設等への出張コーラスにも積極的に取り組んでいます。

歌人の足あと（福崎町）

福崎町文化協会
内山嗣隆

豊かな経済力と学問を重んじる風土、それに市川水系特有の自然、文化等が柳田國男、井上通泰の学者文化人を生むもととなり、これらがまた短歌等の文芸を育む素因となったものと思われる。

・短歌結社「文学圏社」の設立

福崎の短歌を語るとき、まず挙げるべきは、戦後の混乱未だ収まらぬ時に発刊された「文学圏」であろう。「文学圏社」の次のような設立趣意書に若い気負いがあふれている「敗戦後の日本において、戦後の荒涼疲弊を払拭せんとしてか、新しい文芸の光を強く希求する傾向あるは蓋し必然の要望と信ぜられるのである。まことに文芸は人間精神昂揚の価値と力において、戦後復興の一先駆たり得るであろう。茲に生誕せる文芸同人誌「文学圏」は叙上の使命にかんじ、貫くに郷土精神を以ってした清新且つ個性ある地方文芸集団である。」このような理念のもとに、木村真康、西部治夫、岸原広明の三人により福崎の地で設立され、昭和二十一年三月に記念すべき第一輯が発刊された。気負いとは裏腹に発刊当初は岸原広明手書きのプリント印刷であったが、以後会員の増えるに従い十五輯くらいから活版印刷へと移行し、当初は散文、詩、短歌、俳句等の文芸の一般を掲載していたがに四輯くらいから短歌誌に変貌していった。第十五輯の消息欄に次のような一節がある「九月四日早朝より編集所に木村真康、矢谷水青、松田道別、萩原節男、木村満二らがあつまり、第十五輯の編集に従い黎明に至る」。

これは設立時の三人の他に協力者の増えた事実と共に「編集に従い黎明に至る」の一文はガリ版印刷から始めて活版印刷に変わりつつあった当時の文学圏の若々しさと熱気あふれる雰囲気が余すことなく伝わって来る。一時は編集委員制をもったが、その後木村真康が主宰し、会計委員は松岡実、編集は萩原節男が担当し、編集委員は岩朝加都良、小畑庸子であった。同人は松本寛子、三浦春子、下村千里、萩野清子、松岡澄子、吉野栄子、堀千寿子、尾上文、奥村冨美江、黒澤正治、牛尾昌江、藤本昌江、大野八重子、塩見松恵、内藤隆史、丸岡哲朗、山根道子、土居　正、山内節子、田中脩治、北浄代などがあげられている。

文学圏幹部がそれぞれ各自の人格のもとに、教室をもち門下を養成しつつ下支えしていたが「文学圏」の運営は順風満帆ばかりとは言えず、編集者の病気、財政上の理由等の事情により、遅刊や中絶に近い状態にまで追い込まれたこともあり、年によっては七冊か、八冊しか刊行できないこともあったが、木村真康主宰以下の縣命の努力によりなんとか廃刊することなく続けることが出来た。その後諸般の事情により発行所も福崎から姫路、神戸へと移している。結社創立以来七十年、社会情勢も大きく変化し高齢化による会員の減少の他経費の面でも運営上危機にさらされながらも、月刊発行を守って今に至っている。現在は発行者浮田伸子、編集人青田綾子以下の体制で発行している。これまで播磨地方を中心として、多くの歌人を発掘、養成し、活動の拠点となり短歌風土の熟成させた貢献は大きい。今年の一月号で通巻七百四十二号を数えるに至っている。

・福崎短歌会

福崎短歌会は、昭和四十七年に大野義之氏（当時公民館長）木村真康主宰等の尽力により発足した。その後に発刊された福崎短歌会の合同歌集『未踏』に木村主宰の執筆した後記が発足当時の事情を伝えている「月一回の集いに僅かの作品を持ちよって、その作品を通じて知る自分の人生を、反芻三省し各々の生活感情を豊かにしようとする努力は尊いのである。私はこの作者たちの熱意には敬意を表したい。そしてこの集を基点として、未踏の人間修行に出発するのである。」ここに掲げた合同歌集『未踏』も平成十七年三月に第七集を発行している。短歌会は毎月第二土曜日の午後一時からの定例歌会に一首提出してお互いに忌憚のない意見を述べ合い鑑賞を楽しんでいる。町の広報に掲載される事が或る種の緊張感を生んでうまくいっているようだ。

・山桃忌奉賛短歌祭

毎年八月に実施している山桃忌奉賛短歌祭の開催も福崎の短歌風土の醸成におおきく役立っていると思う。柳田國男、井上通泰の業績と遺徳を偲んで町主催による山桃忌を毎年開催しているが、これに奉賛する形で短歌祭を開催してはどうかという意見もあり、記録によると昭和六十一年六月十六日に文学圏の木村真康主宰をはじめ幹部と福崎短歌会の会員数名が、大善寺の棟廣照文宅を訪問し、かねてから棟廣氏が提案されていた「山桃忌奉賛短歌祭」の趣旨説明を聞き、出席者全員が賛同、早急に実行委員会を立ち上げることとし、役場関係等には棟廣氏に依頼することとし、町内の各種団体、近在の短歌会、高等学校、新聞社等に趣意書を送り、協賛、後援を依頼することが決定された。このようにして第一回「山桃忌奉賛短歌祭」が十月十二日に神崎郡歴史民俗資料館にて開催された。出詠歌数は二百二十九首であった。「山桃忌奉賛短歌祭」の主旨からして第二回以降は山桃忌にあわせて開催することとし、場所も柳田國男記念館に移して開催することにした。第二十六回以降文化センターに場所を移している。

選者については、この短歌祭が「文学圏社」と「福崎短歌会」を主体に始められた経緯から第四回までは文学圏社の同人にお願いしていたが、第五回は野瀬昭二（高嶺同人）、第六回は上野晴夫（ポトナム同人）、第七回から第二十三回は川口汐子（をだまき同人）の諸氏にお願いしている。現在は楠田立身氏（兵庫県歌人クラブ顧問、象の会代表）が担当されている。平成二十九年（第三十二回）までとぎれることなく開催されており最近は県外の出詠者も増えているのは喜ばしいことである。最近五年間の応募歌数は二十五年度（二十八回）二百九十首、二十六年度（二十九回）三百一首、二十七年度（三十回）三百七首、二十八年度（三十一回）二百八十一首、二十九年度（三十二回）二百九十七首である。

・恋と革命の歌人岸上大作

昭和三十年に福崎高校に入学した岸上大作は、短歌グループを指導していた山下静香教諭に出会い短歌にめざめていった。当初抱いていた小説家志望を諦めて、短歌一本で進むことを決意し、大学受験雑誌等に積極的に投稿するようになった。と同時に早稲田大学の教授である歌人の窪田章一郎の主宰する短歌結社「まひる野」に入会し、同時に福崎の「文学圏」にも入会し、歌会にも出席するようになった。本格的に短歌に打ち込むようになったのは国学院大学に入学し「短歌研究会」の熱気にふれてからである。

また、時代の寵児、寺山修司を意識してか短歌にのめり込んでいった。昭和三十五年は日米安保条約の改定反対運動のまき起こった年であり、中学時代から社会問題に関心の深かった大作は以後、短歌と恋愛と学生運動に興味が集中していった。安保闘争のさなかに「短歌研究」の新人賞に応募した大作の「意志表示」五十首は推薦作となり、四十首が九月号に掲載された。高校時代からの夢が実現したわけであるが、短歌ジャーナリズムに注目され精神的負担もかなりあったものと思われる。それに、少し過度と思われる激しい恋愛への欲求と失恋、安保改定反対運動の挫折等が重なり、彼を自死に追いやったのではないかと思われる。惜しまれてならない。

・井上通泰の歌人としての歩み

井上通泰は他の業績もさることながら歌人として広く世に知られている。幼時から詩文に長じていたものと思われるが、本格的に歌を学んだのは東京に出てからである。播州出身の歌人國富重比古に師事していたが、何年かの空白の後に下宿先の蔵書の中に『桂園一枝』という香川景樹の歌書があり、その中の次の一首（春の野のうかれ心は果てもなくとまれといひし蝶はとまりぬ）が眼にとまり、「これまで見た歌の多くが調想相たぐはざるは歌その物の罪にあらずして作者の咎である」と後に書いているようにこの一首により彼の歌心は開眼し香川景樹門下の松波資之の添削を受けることになった。歌人としての通泰の存在は森鴎外と共に発行した『しらがみ草紙』により世にひろく知られている。しかし香川景樹の詠風に傾倒しつつも、桂園派の枠内にとどまる人ではなかった。その後、通泰の歌学研究は和漢朗詠集から万葉集に至り、その詠風にも万葉研究の余波として万葉的な語法と声調が浸潤して来たといえる。通泰の詠風を考えるとき、明治三十九年に山縣有朋の内意により設立された「常盤会」の活動は重要であると

思われる。この会において通泰は森鴎外と共に明治時代に相応しい歌調の研究に幾多の業績を残している。明治四十年に御歌所寄人に任ぜられた。その後通泰は歌作りの傍ら、万葉集の講義と研究に精力をついやした。その輝かしい成果が『万葉集新考』八巻である。「万葉集新考」に続いて、「万葉集雑攷」が公刊された。これは新考の八巻の完成される以前から公にしてきた万葉集に関する雑攷をあつめたものである。このように通泰は、万葉集研究のため彼の生涯の大きな部分をささげ倦むことを知らなかった。その心境を歌にもとどめている。

「なら山をいま一たびとおもへども分くべき峰のなほおほくして」

没後に発刊された『南天荘集』は通泰の全歌集に相当するが、それに収録されている歌数は二千五百九十四首で、作歌歴五十有余年の作品としては多いとは言えず、通泰は元来寡作家であったと思われる。

・柳田國男の歌人としての歩み

柳田國男は感受性の鋭い人で幼少時から独学でひたむきな感じの純情な抒情性のある歌を詠んでいるが、本格的に歌を始めたのは上京後兄井上通泰の勧めで桂園派の歌人松浦萩坪の門に入ってからである。国木田独歩や田山花袋などと共に題詠で恋の歌などを盛んに詠んでいる。この時期は國男が作歌に最も精励したときで、主な作品発表の場は、森鴎外や兄通泰の発行する「しがらみ草紙」であった。高等学校入学以降は和歌よりも新体詩に熱中するようになっていった。古今集以来の題詠という方法から、実感、実情を詠むということから自然に新体詩に関心が移っていったものと思われる。その後大学を卒業して農商務省にはいり経世済民の実学志向に目覚めるにつれ逆に新体詩への関心が薄れていった。これは若き行政官として行政の実態を見るうちに文学によらぬ新しい表現意欲の高まりを感じたにちがいない。

『遠野物語』や『後狩詞記』の刊行は恋の詩人松岡國男から民族学者柳田國男への転生といえるかも知れない。しかしながら、新体詩は捨てたが和歌はついに捨てきれなかった。むしろ、和歌を愛し、和歌への思いが深きが故に当世風の歌を詠むのを潔しとしなかったのかも知れない。和歌は紙に書いて人に見せるより、花鳥風月を詠いあげて座中の人々と共に楽しむものという松浦萩坪の説、即ち桂園派の主張が終生、柳田國男の短歌観の根底にあったものと思われる。そのような意味で柳田國男は旧派のすたれゆくご時世に立ち会ったひとりかも知れない。

「うぶすなの森のやまもも高麗犬は懐しきかなもの言はねども」

うぶすなの森のやまもものように歌は幼いころから身に備えた歌口によって柳田國男の体内に生きつづけたものと思われる。國男の歌数については、未見の日記やノートに書き添えたものを拾うと増えるかも知れないが三百余首が明らかになっている。（幼少時代の『竹馬余事』の歌を除外して）

福崎町文化功績賞　表彰

3月4日、平成29年度文化功績賞、柳田國男ふるさと賞、吉識雅夫科学賞、スポーツ功績賞の表彰式を行いました。受賞されたみなさんは、次のとおりです。

氏　　名	所　　属	受賞分野
赤松　紗奈	福崎東中学校３年	「社会を明るくする運動」の作文
木畑　歩	福崎東中学校３年	税についての作文
松岡　莉緒	福崎東中学校２年	「少年の主張」の作文
羽室　京太郎	福崎西中学校３年	美術作品（絵画）
牛尾　優那	福崎西中学校２年	標語（緑化作品）
宮田　理久	福崎小学校５年	読書感想文

第五回福崎町柳田國男ふるさと賞　中学生の部　受賞

「福崎町の狛犬について」

福崎町立
福崎東中学校１年
藤田捺未

私は、福崎町の神社にある狛犬について調べました。

まず始めに、なぜ狛犬について調べようと思ったかについて説明します。神社を参拝すると狛犬が置いてあるのを見かけます。その狛犬をよく見ると顔や形が微妙に異なっており、私はそのことが以前から気になっていました。そこで、普段は決まった神社しか行きませんが、この機会に福崎町の神社をまわり、どんな狛犬が置かれているか調べてみることにしたのです。

実際に調査する前に、狛犬とは何かについて調べてみました。狛犬とは、獅子や犬に似た想像上の生物とされています。神社の社殿前に置かれている狛犬は、獅子と言われ、中国の漢の時代以降の石獅子の系統を引くもので、守護神的な意味あいを持っています。わが国で狛犬が出現したのは、平安時代からです。一般的に、獅子・狛犬は向かって右側の獅子像が「阿形（あぎょう）」で口を開いています。左側の獅子像が「吽形（うんぎょう）」で口を閉じています。古くは角を持っていましたが、昭和時代以降に作られた物は、左右ともに角がないものが多く、口の開き方以外に外見上の差異がなくなってきています。また、狛犬はその地方その地方によって江戸型、浪花型、出雲型などいろいろなタイプがあります。江戸型は、目がやや小さめで、耳は伏せ耳、鼻は小さく、あごひげがカールしているなどの特徴があります。浪花型は、目がぎょろ目で、耳は折れ耳、鼻は大きく団子鼻、両脇に少しひげがあるなどの特徴があります。出雲型は、目がつりあがっていて空豆型で、耳は垂れ耳、鼻は獅子鼻、短めのあごひげがあるなどの特徴があります。

このように、狛犬についていろいろと調べた後に実際の調査をしました。今回行ったのは、福崎西中校区で10、田原地区で12、八千種地区で7、合計29の神社です。調査した神社は次の通りです。

◆福崎西中校区

①一之宮神社（板坂）②田賀神社（田口）③諏訪神社（長野）④大歳神社（神谷）⑤三宮（福田）⑥大歳神社（福田）⑦二之宮神社（山崎）⑧新町天満宮（新町）⑨八幡神社（西治）⑩廣田神社（高橋）

◆田原地区

①恵美須神社・大国主神社（井ノ口）②鈴ノ森神社（辻川）③北野天満神社（北野）④田嶋神社（西野）⑤熊野神社（田尻）⑥三十八社（吉田）⑦八坂神社（八反田）⑧與位神社（中島）⑨藤田神社（長目）⑩住吉神社（西光寺）⑪大年神社（大門）⑫大歳神社（亀坪）

◆八千種地区

①日吉神社（西大貫）②天満神社（東大貫）③大年神社（南大貫）④地神社（庄）⑤大歳神社（余田）⑥若宮神社（小倉）⑦熊野神社（鍛治屋）

これら29の神社をまわり、神社が造られた年を調べるとともに、神社の写真と左右の狛犬の写真を全て撮り表にまとめました。その結果、福崎

町内にある狛犬は、近畿地方でよく見られる浪速型がほとんどであることがわかりました。

最後になりますが、町内には想像していたより多くの神社があり、見て回るのが本当に大変でした。また実際に調査してみて、浪花型が多い以外に、狛犬造りにはあまり決まりはなく、地域の石材加工業者によって型が違っていることもわかりました。風化によって新しく造られている物もありますが、井ノ口の恵美須神社は、昔造られた古い物が手洗い石のところに置いてありました。私はこのような昔造られた物が風化したりすることがないようしっかりと管理し、出来るだけ保存していけたらいいなと思いました。

第五回福崎町柳田國男ふるさと賞　小学生低中学年の部　受賞

玉木十ろうべえについて

八千種小学校三年
内藤　のこ

八千種小学校の玄関の横に、穴の開いた大きな岩があったので「何だろう」と思って調べてみることにしました。

岩の下には、玉木十ろうべえの馬つなぎ石と書いてあります。まずは、玉木十ろうべえについて調べました。

玉木十ろうべえは一六五〇年頃に八千種小学校のところに住んでいました。一六五〇年頃は、田んぼの開発や、川の整備がたくさん行われていました。この八千種地区は、雨の少ない時にはすぐに水がなくなり、水を求めて村人同士で争いがたくさん行われていました。雨の多い時には、まわりの山から平田川に水が流れこみ、洪水になり困っていました。

村人は「水さえあれば、稲が実る」と神様にお祈りしたり、殿様にお願いしたりしました。

殿様は、玉木十ろうべえを八千種に行くように命じました。玉木十ろうべえは山口県の武士でしたが、このころ姫路城下に住んでいました。十ろうべえは住吉山のふもと（今の八千種小学校）に家を建てて活動を始めました。十ろうべえは、田んぼを作り、農業などを教えました。暇な時は馬に乗って見回りをしていました。八千種の水不足をなくすためにため池づくりもしました。機械がない時代なので全部手作業です。八千種の村人みんなが協力しました。そして、できたのが庄宮の池と苅又（かりまた）池です。また、平田川は、大雨が降ると洪水になってしまうので、洪水にならないように、作りかえました。

村人たちは、水不足や洪水の心配がなくなったので大喜びだったそうです。十ろうべえはこのように八千種のために力を尽くした恩人となりました。

しかし、殿様にお願いごとをしたため、怒りをうけて八千種から追放されてしまいます。そのときも、自分の田んぼや畑を村人に分け与え、何も言わず立ち去ったそうです。

この岩は、村人たちが玉木十ろうべえへの感謝のために残してあるそうです。この岩の他にも、小学校の東のお墓に玉木十ろうべえの記念碑もあります。私たちの先祖が十ろうべえにすごく感謝していたことが分かりました。

私はこの岩を調べて、玉木十ろうべえが八千種のために、村人と協力して、私たちの先祖の暮らしを守ってくれたことがすごく分かりました。しかし、だんだん忘れられていると思います。今でもこの池や川は私たちの暮らしを守ってくれています。私も大切に守っていこうと思いました。

第五回福崎町柳田國男ふるさと賞　小学生高学年の部　受賞

大庄屋三木家の謎にせまる！

八千種小学校五年
上杉　このみ

◆調べようと思ったきっかけ

わたしは歴史が大好きです。以前から三木家に興味があり、一般公開している時も、お母さん、妹と一緒に何回か見に行きました。展示してあるものを見ながら「三木家の人たちはどんなことを考えていたのかな。」と疑問がわいてきて、それについてもっと知りたいと思いました。夏休みの初めに開かれた三木家の見学会に参加した時には、たくさん写真を撮って昔の大きな家のつくりや工夫、柳田國男先生の生家とは違うところを発見しました。保存修理の監督の方からも修理前の三木家のこと、昔の家の暮らし、なぜそうなっているのか、実際の修理のときはどんな様子だったのかなどのお話もたくさん聞かせてもらいました。見学を終えて分かったことやおもしろかったこと、そして他の人に知ってもらいたいことを中心にまとめました。

◆大庄屋ってどんなもの？

江戸時代にはそれぞれの村に地方三役の一つ「庄屋」があり、郡代、代官のもとで村政を担当していました。今で言う村長さんの役割です。そして、三木家が務めた「大庄屋」とは、この庄屋をまとめる役割をしていました。村々の取り締まりはもちろん、争論の解決などの仕事も日々行い、みんなから頼られる存在でした。

◆基礎知識 身につけたのは三木家

日本民族学の父・柳田國男は明治八年（一八七五年）、松岡家の六男として辻川に生まれました。三木家と松岡家は代々学問的交流があり、國男は十一歳のとき、一年間三木家に預けられました。ここで國男は歴代の当主が収集した大量の書物と出会い、この読書体験が後年、日本民俗学を生む基礎となりました。九代当主・三木拙二（せつじ）と國男は二歳違いであり、竹馬の友として生涯にわたり交流を深めました。

◆大発見！謎の文字

平成二十二年度から実施された保存修理工事の際に壁面から墨書が発見されました。墨書とはその名の通り、墨で書かれた文字のことです。この発見によりそれまではっきりと分かっていなかった主屋の建築年代が「宝永二年」ということが分かるようになりました。年代が書かれた墨書が発見されたのは主屋だけではありません。副屋や内蔵などの五つの建物からも、墨書が見つかっているのです。この墨書を手がかりに研究し、今では三木家の建物全全ての建築年代が分かっています。昔の人は、この謎多き大庄屋に、しっかりと建てた年を書き記していたのですね。

◆三木家の中はどうなっているの？

○大きな梁

三木家の内部には、建物全体の重さを支える「梁」があります。梁は二階の天井や一階に、たくさんありました。梁は大きな家にしかないそうです。

○薄暗い部屋

二階には物置部屋があります。そのさらに中には暗

い部屋が見えます。そこはかつてお客さんが寝泊まりする時の部屋だったとか。謎が深まるばかりです。

○天井の窓

一階にあるかまどでご飯を炊いた時に出るけむりを外へ出すためにかまどの真上には窓（あな）が開いていました。柳田先生の生家にはこのような窓はありませんでした。すると、これも大きな家だけにあるものなのでしょうか。

◆三木家ってこんな建物！

三木家は昭和四十七年に兵庫県重要有形文化財に指定されました。

○建てられた年　一七〇五年（宝永二年）

○敷地面積　一八六一・一八㎡（約五六三坪）

○建物　①主屋（一七〇五年）
②副屋（一七七三年）
③離れ（一七七三年）
④内蔵（一六九七年）
⑤米蔵（明治前期）
⑥酒蔵（一七一三年）
⑦角蔵（江戸後期）
⑧厩　（江戸後期）
⑨表門（一八七四年）

◆取材を終えて

三木家について調べて、わたしはもっともっと歴史が好きになりました。三木家のことは詳しく知らなかったのでいろいろなことを知ることができたし、たくさんの発見もあっておもしろかったです。調べた中でもわたしが特にすごいなと思ったことは、三木家が建てられた一七〇五年（宝永二年）から今日までの間、台風などの自然災害や戦争があったにも関わらず、いろいろな人の手で直され、たくさんの人々に支えられてこの福崎町に歴史を残しているということです。三木家の人々が残していった立派な建物と歴史を私たちも大切にして、この先ずっと残していってほしいです。私は福崎町に引っ越してきてまだ二年だけれど、すてきな歴史について学んだことで、福崎町が大好きになりました。

表紙の写真

表紙の絵は、松岡映丘作「右大臣実朝」の大下図で、柳田國男・松岡家記念館に所蔵されています。日本画は、小下図、大下図、本作の順に作成します。大下図は本画作成のもととなり、原寸大でレイアウトや手順などを確認するためのもので、大下絵、草稿とも言います。

松岡映丘の傑作の一つと言われる「右大臣実朝」ですが、大下図も本画の緊張感をそのままに、装束の地模様なども細かく表現されています。また、雪は本画にはありますが、大下絵図では確認できません。どのような経緯で雪が描かれるようになったか、興味をそそります。今年は、松岡映丘没後八十年を迎えるということでご紹介いたしました。

編集後記

たくさんの方々のご協力により、福崎町文化第三十四号を発刊することができました。

玉稿をお願いしました皆様方には大変お忙しい中執筆いただき、ご協力くださいましたこと厚く御礼申し上げます。

ありがとうございました。